



Title	Multifaceted perception of school climate: association between students' and teachers' perceptions and other teacher factors
Author(s)	平田, 郁絵
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/101895">https://doi.org/10.18910/101895</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 論文内容の要旨

氏 名 ( 平 田 郁 絵 )

## 論文題名

Multifaceted perception of school climate: association between students' and teachers' perceptions and other teacher factors  
(学校風土の多角的評価：児童生徒と教師の認識, その他の教師要因との関連)

## 【背景】

学校風土とは、普遍定義はないが、生徒と教職員の相互作用を形成通して、望ましい行動や規範を設定するための、共有の信念、価値観、態度である、と概念化されている (Wang and Degol, 2016)。

先行研究では、学校風土に関する教師と生徒の評価に関連は見られない (Debnam et al., 2021; Molinari and Grazia, 2023)。Mitchellら (2010) の研究では、生徒の学校風土評価は学校レベル要因 (生徒の転出入、校長の交代など) と関連したが、教師の学校風土評価は、教室レベル要因 (学級経営の悪化や生徒の破壊行動など) と関連していた。また、教師の学校風土評価は教師自己効力感やストレスといった個人要因に影響される (Malinen and Savolainen, 2016; Yang et al., 2018; Mansor et al., 2021)。筆者らの知る限り、生徒の学校風土評価と教師個人の要因との関係を調査した研究はない。

## 【目的】

学校風土に対する教師と生徒の評価に有意な関連があるかどうか、関連がない場合は、教師自己効力感やストレス、指導実践などといった教師個人の要因がそれぞれの認識に関連しているかを調査した。

RQ1：担任教師 (以下、教師) の学校風土評価は、その教室における生徒の学校風土評価と関連するか

RQ2：教師の学校風土評価は、教師自己効力感、ストレス、指導実践といった教師の個人要因と関連するか

RQ3：教師個人の要因を統制後、生徒と教師の学校風土に対する認識の関係はどのように変化するか

## 【方法】

<調査対象者> 公立学校 (小学校8校・中学校3校) 生徒 (4年生から9年生) 3395名と教師103名のうち、担任教師の回答が得られた59学級の生徒1831名 (53.9%), 教師59名 (57.3%) を分析対象とした。

<調査内容> 生徒の学校風土評価には日本学校風土尺度 (JaSC) を使用した (Nishimura et al., 2020)。また、学年、学級、性別を求めた。教師の学校風土評価はTeaching and Learning International Survey (TALIS) において学校風土と規定されている規律風土、教師と生徒の関係性、学校への参画を使用した。教師個人の要因はTALISから教師の自己効力感、職場の幸福感とストレス、仕事ストレス、生徒行動ストレス、指導実践を使用した。加えて、年齢、性別、現任教歴を求めた。

<分析> 生徒と教師の学校風土評価の関連はマルチレベル分析を、教師の学校風土評価と教師個人の要因は重回帰分析を用いた。

## 【結果】

RQ1：教師が評価した学校風土の3つの尺度 (規律風土、教師と生徒の関係性、学校への参画) のうち、規律風土のみが教室レベルで生徒の学校風土評価と有意に関連した ( $\beta = 0.132$ , 95% CI: 0.063, 0.201,  $p < 0.001$ )。

RQ2：教師が評価した規律風土は、教師の自己効力感、職場の幸福感とストレスと有意に関連した ( $\beta = 0.751$ , 95% CI: 0.369, 1.132,  $p = 0.001$ ;  $\beta = -0.220$ , 95% CI:  $-0.421$ ,  $-0.018$ ,  $p = 0.036$ )。教師と生徒の関係性は、教師の自己効力感、職場の幸福感やストレス、仕事量のストレスと有意に関連した ( $\beta = 0.225$ , 95% CI: 0.007, 0.443,  $p = 0.045$ ;  $\beta = -0.359$ , 95% CI:  $-0.566$ ,  $-0.152$ ,  $p = 0.003$ ;  $\beta = -0.332$ , 95% CI:  $-0.484$ ,  $-0.180$ ,  $p = 0.001$ )。学校への参画は、職場の幸福度とストレスにのみ関連した ( $\beta = -0.606$ , 95% CI:  $-0.950$ ,  $-0.262$ ,  $p = 0.003$ )。

RQ3：教室レベルにおいて、規律風土のみが、教師個人の要因を統制した後でも、生徒の学校風土評価と有意に関連した ( $\beta = 0.097$ , 95% CI: 0.006, 0.187,  $p = 0.036$ )。

## 【考察】

本研究において、教師評価の3つの学校風土尺度のうち、規律風土のみが生徒の学校風土評価と関連し、この関連は、教師個人の要因 (教師の自己効力感やストレスなど) を統制した後も有意であった。

規律風土に含まれるような生徒の具体的な行動を問う項目は、生徒と教師の学校風土評価の不一致を避けるため

に有効なことが示唆された。また、規律風土を維持すること自体、生徒が学校風土を肯定的に評価するために重要な可能性がある。一方で、厳しい規律（体罰、暴言、強制など）は生徒の学校風土評価との間に負の関連がある（Banzon-Librojo et al., 2017）。期待される行動を体系的かつ明示的に生徒に教え、積極的な行動を身につけさせる学校全体のアプローチ（SWPBIS）が望ましいだろう（Sugai and Horner, 2002; Horner and Sugai, 2015）。

生徒の学校風土評価と教師の評価する「教師と生徒の関係性」との間に関連はなかった。教師は生徒よりも関係性を高く評価する傾向があり、これは教師の希望的観測を反映しているのかもしれない（Wubbels and Brekelmans, 2005）。これらを解決するために、教師は教室の観察や生徒の評価したフィードバックデータを継続して取り入れたり（Wubbels et al., 1992）、教師が自分自身の認知の枠組みにおける偏りを意識したりする必要がある（都丸・庄司, 2005）。

教師が評価した「学校への参画」も生徒の学校風土評価とは関連がなかった。しかし、教師の学校運営への意思決定や参画は、教師の職場の幸福感やストレスの予測因子である（Nalipay and Jenina, 2023）。本研究でも「学校への参画」が教師の職場の幸福度やストレスと比較的強く関連していた。教師の幸福感やストレスが生徒の学校生活に影響を与えることは報告されているため（Glazzard and Rose, 2019）、教師の学校運営への参画や労働条件と、生徒の学校風土評価との関係については、さらなる研究が必要である。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 平 田 郁 絵 )			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	下野 九理子
	副 査	教授	小林 宏明
	副 査	講師	岩渕 俊樹

## 論文審査の結果の要旨

学校風土についての教師と生徒の認識・評価についての関係性とそれに対して教師自身の個人的な要因の関与について調査した研究である。小学校、中学校の3000名を超える生徒に対して行った調査であり、最終的な検討は担任と生徒の両者の結果が得られた1500程度の分析になっているが、しっかりと統計学的な分析を行なっている。学校風土を3つの尺度（規律風土、教師と生徒の関係性、学校への参画（教師の））に分けて分析した結果、教師と生徒の関係性が強かったのは規律風土であった。またこれらの関係性には学級の規模は関係なかった。他の尺度に関しては教師と生徒の関係性は認めなかった。同じクラスの生徒同士の結果の関連性はあまり強くなく、生徒の感受性に違いがあると見られる小学校・中学校においては小学生の方が関連が強かったという結果であった。本研究は横断的研究であり、校長が研究に協力的、かつ、担任が協力してくれたクラスに限定しているという点においては研究の限界もあるが、そのことを研究者本人がしっかり自覚しており、次に繋げるための方策についても考察されていた点について評価できる。研究発表は全体として明確でわかりやすく工夫されたプレゼンテーションであり、質疑応答についても真摯にしっかりと答えておられた点も評価できた。

以上をふまえて、本研究の成果は博士（小児発達学）の学位授与に値すると判断した。